

そんなに急いでどこへ行く

坂田三允（群馬県立精神医療センター看護部長）

かれこれ10年にもなるだろうか、何かの本で、日本の母親が一番多く口にするのは「早く」という言葉だと読んだ。「早く起きなさい」「早くごはんを食べなさい」「早く学校に行きなさい」「早く帰ってくるのよ」「早く宿題しなさい」「早く寝なさい」「早く…」早く…」そしてきわめつけが「明日は早く起きるのよ」なのだと。思い当たる節がないわけでもなく、苦笑いした記憶がある。「時は金なり」。時間を無駄にしていけないと子どもの頃教えられたような気もする。しかし、そもそも無駄とはどういうことをいうのだろう。急いで用をすまして、残った時間を何に使うというのだろう。

この書はそのような「早く」何かをすることに価値をおく生き方の対極にあるものだ。「成長、景気、GDP、効率、競争、（中略）。思えば、これらを合い言葉とするぼくたちの社会は、実はぼくたちの身体性や日常性や文化をめぐる夥しい数の否定形によってこそ可能になったのです。それまでのぼくたちの慎ましやかな経済は、生業は、生活の技術は、伝統的な知恵は、（中略）あまりにもスローなものとして否定され、卑下されて、（中略）。ぼくたちの社会は、時代は自己否定や自己憎悪という呪詛に満ちている」。スロー・イズ・ビューティフルはその呪縛から解放されるための祈りなのだと著者はいう。

実はこの書にたどりつくまでに、意図していたわけではないのだが、書評にひかれて私はスローな人生に関する何冊かの本を読んだ。最初はフランスのジョゼ・ボヴェというチーズ生産者（彼は1999年春、建設中のマクドナルドを

破壊して逮捕され世界的に有名になった）に対するインタビューをまとめた『地球は売り物じゃない』という本である。この中でボヴェが主張する「農業が工業化してしまったことを問題とする考え方」に私は強く惹かれた。私が次に手にしたのは『ファストフードが世界を食いつくす』という本だった。これはアメリカでいわゆるファストフードが作られるようになった過程と、生産される工程をつぶさにレポートしたものだ。生産性向上のために、そして安価を保つために、メキシコからの移民を低賃金でこき使う。彼らは1〜2か月で体を壊し、怪我をする。耐え切れずに少しでも楽なところを探して転職していく。職を求める人はいくらでもいる。だから彼らは使い捨てられる。そして「ミルクシェイクの機械にはごきぶりがはびこり、解凍のために冷凍庫から出してあるハンバーガー用ロールパンの上には、夜ごとに、鼠の大群が糞尿を撒き散らしていたという」製品管理の杜撰さ。本当に許せない。

辻の『北』の国々の我々は『南』が『遅れている』ことに疑いをもたない。だが『遅れている』と言えるのは、『南』の彼らが我々と同じ走路を『先端』へ向けて競争している、と仮定した場合のことだ。ところでその仮定は正しいのか？という問いに私たちは何と答えるのか。「多様な価値観に基づいて戦いを進め、さまざまなレベルに応じた答えを作りあげるのさ」。ボヴェの言葉だ。ボヴェのように戦うことはできなくても、ありのままの自分を認め、流れに飲み込まれることなく静かに生きていくのもいいんじゃないかなあ。



さかた・みよし

2001年の4月から群馬県立精神医療センターにて看護部長の任を仰せつかることに。通勤に時間がかかるようになって、電車を書斎がわりに本をたくさん読もうと思っていたのに、ついつい、ZZZZ…。寝室がわりになってしまっている。大きな計算違いだったわー。

●群馬県立精神医療センター：〒379-2221 群馬県佐波郡東村大字国定 2374